# この小さな世界であなたを求める

クロカラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この小さな世界であなたを求める

【Ｎコード】
Ｎ７５８１Ｆ

【作者名】
クロカラス

【あらすじ】
少女はイブの日正体不明の素敵な二人組と会った。素敵なお屋敷。素敵な人たち。そんな人たちが紡いでいく素敵な物語・・・

# 一想　聖夜

今日は12月24日つまり、世間でいうところのクリスマス・イブだ。

そんなおめでたい日、私は暗澹(あんたん)たる気持ちで夜道を歩いた。
3人家族の我が家は両親が半年前に海外に長期出張中だ。
おまけに友人2人とするはずだったクリスマス・パーティーをドタキャンされてしまった。

「はぁ～寒いっ！」
半ばやけくそで声を出し寒さを吹き飛ばそうとする・・・がそんなもので吹き飛ぶほど世界はやさしく作られちゃいないことを改めて認識する。
「なんなのよっ！もうっ！」
イルミネーションの明かりに照らされながら、私は自分の不幸を呪う。同時にドタキャンかました友人の不幸も祈ってみる。
「大体イブだからって彼氏といるってのが間違ってるのよねっ！馬鹿馬鹿しいっ・・・」
彼女の悲しき魂の叫びが響き渡る。

このまま誰もいない家に帰ってクリスマス特番でも悲しく見るか？盛大にファミレスで食べるか？で激しく葛藤した結果正月に備えるため前者を選択した。
（はぁ～、お腹すいたぁ～）

公園への道を通り近道をしようとする。
数分後・・・・この選択が過ちだったと彼女は思い知らされること

となった。

「・・・・・・しまった」
公園が、数人のはしゃいでいらっしゃる方たちの夜のお戯(たわむ)れの場所だとは知らずに踏み込んでしまった。

公園といえどもいささか小さい場所
そんな場所に人が入ればすぐにわかってしまうのは当然のことである。

「うわぁ、全員こちらに注目していらっしゃる・・・」
ちょっと、危ない感じの少年たちがじりじりと近寄ってくる。
（なんでだろ？今日、厄日かな？）

「おい？どうする？結構可愛い顔してるぜ？」
「ああ。久しぶりに朝までトベそうだな」
「それ、サイっコー」

あと３ｍというところまで少年たちは迫ってきていた。
とりあえず、策はないでもなかった。こう見えてもそれなりに体育の成績は良い
つまり、こんな時にとる手段は・・・

「逃げるが勝ちっ！」
というセリフと同時に走り出した。

だが、いくら運動神経が良くても男性の体力にはかなわなかった。
いや、正確に言うと服をつかまれそのまま地面に倒されてしまった。

「いったぁ・・・・」
「逃げなきゃ優しくしてヤレたんだけどよぉてめーが逃げっからよぉ」
と明らかに貞操の危機に直面していた。

「いや・・・ちょっ…待ってよ・・こんなのって・・・」
動こうに手足がつかまれぴくりとも動けそうにない。
少年たちは既に順番まで決め始めている。
下品な笑い声しか聞こえてこな・・・・かったのだが・・

「それくらいにしておいていただけません？」
よく澄んだ声が聞こえた。

「全く、かわいい嬢ちゃん一人に何やってんだか」
今度は、バスのゾクゾクッとくるような声が聞こえた。

暗闇から二人組の男が出てきた。
細身の人と体ががっちりした男の二人組だった

「数人がかりで女性を取り押さえるとは・・・」
突然出てきた男二人組に少年たちが反応する。

「お前らにゃ関係ねーだろっ！失せろ！」
「いいやぁ～？失せるのはお前らだ」
だんだん、男たちの距離が縮まっていく

「ジャック、こいつらどうする？」
「そうですね。なるべくなら僕も手荒なまねはしたくなのですが、
彼らが女性を解放しないというのであれば体に教え込ませるしかな

いですね」
「だな」

少年たちは、二人の会話にしびれを切らしたように
「ごちゃごちゃうるせぇぞっ！」
一人が、男たちに向って突っ込んでいく
細身の男の方が倒しやすいと思ったのかジャックと呼ばれた男に向かっていく

向かっていった・・・と思ったのだが、いつの間にか横のほうに倒れている。
「なっ・・・」と男たちにも動揺が広がったようだ。

「もう一度申し上げます。ここから立ち去っていただけませんか？せっかくのクリスマスですし」
「バッカヤロウッ！そんな、情けねぇマネできっかよ！」
少年たちが一斉に二人の男に向かっていった。と、同時に私の手足が自由になる。

まさに一瞬
わずかな時間の間だけで二人の男に向かっていった少年たちがすべて地面に伏していた。

「口ほどにもないやつらだったな」
「ですね。っと」

二人の男が私の方に近寄ってくる。
「もう大丈夫ですよ。立てますか？」
暗くてよくわからなかったケドよく見れば細身の男はとてもきれいな顔をしていた。いや、きれいという言葉だけでは足りないくらい

だ。
両手の人差し指には銀の指輪を
両手の中指には金の指輪がとても印象的だった。
一番印象的だったのは、眼だ。
右目は普通の日本人と同じ黒い目なのだが、左目は紅の瞳だった。
体ががっちりした男の人はそれだけで強そうという印象を受ける。
二人とも黒いスーツとコートに身を包んでいた。

「あの、大丈夫ですか？・・・へっ？あれっ？羽崎さん？」
「えっ？なんで私の名前を？」
「おっ、なんでぇジャック。知り合いかよ？」

おかしい。
こんな美形なら忘れるはずがないんだけど
それに、この言葉づかい。
絶対忘れるはずがない。

「失礼ですが、御名前は？」
「羽崎ですけど・・・羽崎亜衣（はねざきあい）」
「ああ、やっぱり」

よくわからないといった様子でもう一人の男が話に入ってきた
「おいおいジャック。ちゃんと説明しろよ」
「えーと、同じ学校の旧友・・・クラスメートです」

（うそっ、私のクラスにこんな人いないよっ）
いくら記憶をたどってみてもクラスどころか学校でもこんな人を見かけたことない。
いたら噂になっているはずだ。

そんな私の疑問に答えるように

「僕、学校では変わりますから」
(何？『変わる』って？どういうこと？)
「っと、長居は無用です。早いところここから出ましょう」
「そうだな、誰かに見られても面倒だしな」

ふと、彼が私の格好に気づいたようで
「その服、泥だらけじゃないですか？」
といって、自分のコートをかけてくれた。

(や、や、優しいぃぃぃぃ！)
「や、でも、汚れちゃいますし。結構ですぅ」
「何言ってるんです。風邪ひいちゃいますよ」
有無を言わさない口調だったので私は黙って従うことにした。

公園を出ようとすると彼が倒れている少年たちに目を止めた。
「悠、携帯貸してください」

悠と呼ばれた男は、ほいよと携帯を渡した。
「どうすんでぇ？ジャック」
「決まってます♪」

ゴホンゴホンと咳払いして3ケタの数字を押していった。
「あっ、もしもし。今、高羅木公園で青年たちがけんかしてるんです。すっ、すぐに来てくださいっ！」
ピッ・・・

「とんでもねぇやつだな。声まで変えやがって」
「彼らがここで凍死したら目覚めが悪いですからね」

「さっ、お巡りさんが来ないうちに出ましょう」

こうして私たちは公園を出ました。
これが、私と彼との出会いでした。

## 二想　黒織　奏樺

公園を出たあと2人との会話が楽しくて仕方がなかった。
「本当に知りません？僕のこと」
「す、すみません。分からないです・・・」
本当に覚えがないのだ。

「いえ、それだけ完璧だったってことですよ。ねぇ、悠」
「ああ、ジャックの変装は俺だって見破るのが難しいからな。嬢ちゃんがわかんねぇのも無理ねぇよ」
「黒織です。黒織奏樺（くろおり　そうか）」
「は？・・・」

クロオリ・・・クロオリ・・・黒織っ！！

「もしかして、髪が長くて黒ぶち眼鏡の地味な黒織！？」
「地味かどうかは分かりませんが確かに黒ぶちの眼鏡をかけてますね」

そういえば、同じクラスなのに影が薄いっていうか存在感がないというか
一度も声を聞いたことがない。
入学してもうすぐ8ヵ月が経とうというのに必要最低限の会話しか、しないし・・・
とても目の前の人と同一人物だとは思えない。
それに年中冬服
真夏の日でさえ上着を脱がない。

「ジャック、俺のことも紹介してくれよ」

「そうですね。羽崎さん。こちら、僕の同僚の麻島悠(ましまゆう)です」
「はっ、初めましてっ。先ほどは危ないところを助けていただきありがとうございましたっ」
「なぁに、女助けんのは男の役目だかんな」

黒織君といい麻島さんといい、この人たちいい人じゃない！
それにしても、黒織君がホントは、こんなきれいな人だったなんて・・・なんか得したかも・・・
同時にたくさんの疑問が出てくる。

「何で学校じゃあんな格好してるの？そんなきれいな顔隠すのもったいないよ」
「プッ、ガハハ。嬢ちゃん。こいつに惚れたかい？やめといた方がいいぜぇ」
「悠！失礼ですよ。えっとですね。僕も面倒なのですけど、どうしてもって言われてるんですよ。それに眼も目立ちますし」
確かにそうだ。
彼の赤い眼はとても目立つ

「その赤い眼ってカラコンじゃないの？本物？」
「普段学校でしているのがカラーコンタクトですね。虹彩異色症自体珍しい症例なのですが、その中でも赤眼は天文学的数値で希少だそうですよ」
「そうなん・・・ハッ、ハッ、ヘックチュンッ！」
さ、寒い。
そういえば、服も湿ってるような。風邪ひいたかな？

「大丈夫ですか？困りましたね」
「ジャック。嬢ちゃん一回家に連れてきた方がいいんじゃねぇか？」
「そうですね。羽崎さん。ちょっと、家に寄っていただけません？」

い、家？
どんなとこだろ？ちょっと気になるかも・・・

「じ、じゃあ・・・、よろしくお願いします」
「では、失礼」

そういって、彼は私の体を持ち上げた。
（ヘッ？どういうこと？ってこれお姫様だっこってやつじゃ・・・・
きゃー、は、恥ずかしい）
でも、彼から出てきた言葉の意味が分からなかった。

「悠、屋根借りましょうか」
「そうだな、その方が早いか」

屋根？
屋根って家の？借りるってどういうこと？

「羽崎さん、目を瞑っていた方がいいですよ」
この瞬間、宙に浮いた気がした。
私が、眼を瞑る前に見たのは塀に乗っていた悠さんだった。

「飛ばすぞ！ジャック」
「人に迷惑がかからない程度に」

まさに、屋根から屋根に飛び渡っていた。
宙に浮いたかと思うとまた屋根が・・・そんな感じだった。
言いようのない浮遊感が体中にまとわりつくような心地よい感覚だった。

そんなに時間はかからなかったと思う。
せいぜい5分くらいだったと、少なくとも私はそう感じた・・・のだが
目の前にある建物は見たことのないくらい大きな家・・・いや、屋敷と言った方が正確に伝わるだろう。
まるで、漫画や絵本の一ページ。映画のワンシーンから出てきた、と言っても納得できる。
そんな建物だった。

「ここが僕らの本拠地です」
そう言う黒織君の顔は、どこか誇らしげだった。
私を抱えたまま彼はドアを開けた。
瞬間

「お帰りっーーー！ジャック・悠ッ！お疲れーーってあれ？」
メイド服を着た女の人や黒織君と同じ黒いスーツを着た男の人が近づいてくる
（み、みんなきれいな人たちだっ。うわぁ、す、すごい）

茶色い髪の毛のきれいな女の人が近づいてきて
「ちょっとちょっと、ジャックその子、どなた？どこから・・・キャー！！！」
いきなり女の人が悲鳴を上げた。

「ジャック！悠！これはどういうこと？」
すごく怖い顔で私の服を指さす。
それは、泥だらけの私の服だった。

「いや、それは・・その・・・ねぇ悠」
「お、おうよ。これにはだな。深い事情が」
しどろもどろになってる二人に追い打ちをかけるように
「言い訳無用！！！こんなかわいい子相手に一級執事二人が・・・
何したのッ！？」

イッキュウ・・・シツジ？
分からない単語が混じってたけど、とりあえず二人が怒られてるってことはわかった。

「ご、誤解ですよっ、この方はですね。え～っと」
「ホラ見なさい！！理由言えないんでしょ！！この子に何したの！！」
「ち、ちょっと待てよ。マリア。この子はだな、俺たちが偶然通りかかって助けたんだって・・・そうだよな？ジャック」
「え、ええ！もちろんです。執事たるわれわれが・・・」

なんだろ？すごく可笑しい
あっという間に私を助けてくれた二人が一人の女の人に言いくるめられてるなんて

「プッ・・・アハハッ、ハハハハッ」
みんなが私の方を見た。
でも、すごく可笑しくって

「ハーッ・・・ハーッ・・・えっと、二人は、私を助けてくれ・・たんです・・ケド？」
息も絶え絶えなるほど面白かった。

「そうだったの？ならいいわっ」
「だから僕たちそう言ってたんですけど・・・ねぇ？」
「ああ、我ながら情けねぇよ」

ここでようやく黒織君が私を降してくれた。
「そういうわけですからマリア。この方をお風呂に入れてください。あと着替えも」
「んもう、ジャックったら。最初からそう言ってくれればよかったのに」

すごい変わり身の早さだ。
さっきとは全然違う。

「パパッー」
かわいい声と共に小さな女の子が走ってくる。
黒織君は、その子を抱えた。

「ただいまです。椿（つばき）」

パパ？パパってアレ？
父親ってこと？えっ？
子持ち？
高校生はパパですか？ってやつ？

「ちょっ、黒ッ」
織君っ、と言おうとしたがその前に

「ハイっ、じゃあ、おねいさんと一緒にお風呂入りましょ」
と先ほどの女の人に私は引きずられていった。

ああ～聞きたいのにぃ～

「ジャック、私たちがあがるころに始めましょ。パーティー」

「ええ、この日のために腕によりをかけた・・・」

最後の方はわからなかった。

メイドさ～ん、ちょっと～待って～

## 三想　　マリア

私が、この屋敷に来て思うこと
それはこの屋敷が・・・広い！
ありえないくらいの広さだ。
たぶん・・・うちの高校くらいの広さがあるのではないかというくらいの広さだった。

「でも、災難だったわね～イブの日に」
「ええ、でも二人に助けられたおかげで大丈夫です」
「そうそう、聞かなきゃいけないことがあったわ。あなたを客として扱うか家族として扱うか・・・どっちがいい？」

客として扱うか家族として扱うか・・・かって『家族』として扱うって何？

「でも、ジャックのクラスメートなんだから『家族』でいいわよね？」
「は、はぁ・・・」
「ここにいるのは、みんな家族よ。とてもいい」
「そうですね」

まだ、1時間もたっていないがわかる。
みんな、とてもいい顔をしてる。

「そう言えば・・あなたの名前は？」
「へっ？えと・・羽崎亜衣（はねざきあい）です。」
「そう。とてもいい名前ね。私は、麻島（ましま）マリア。ほら、ジャックと一緒にいた大きい男が私の旦那」

「えっ？そうだったんですか」
「そっ。さっ入りましょ」

私はドアを開ける。
そこは・・・とても広い浴場だった。
「ひ、ひろーいっ」
「すごいでしょ。ジャックのおかげよね」

いまだに黒織君＝ジャックというのはよくわからない
「あの、どうして黒織君はジャックって呼ばれてるんですか？」
「ああ、あの子は、国によって名前が違うの。でも、私なんかはココ作るときに本国から引き抜かれてきたからね。ジャックって呼んでるの」
正式にはジャック・スペンサーだけどね、と補足してくれた。

私は、浴槽につかりながら質問を続ける。
（くぅー、足が伸ばせるお風呂ってさいこー！）

「黒織君って何してる人なんですか？」
「執事よ。一級執事。それから、あの子を呼ぶときは、奏樺（そうか）かジャックって呼んであげなさい」
「ええっ！？な、なにゆえに」
「プッ、かっわいーわね。亜衣ってばサイコーよ。ここではね、名前で呼び合うのよ。『さん』なんかもいらないの」
「で、でも・・・」

恥ずかしい。
名前で呼ぶってなかなか難しい。
しかも、『君』や『さん』をつけてはいけないのだから尚更だ。

「それが、ジャックの決めたルールだからよ」
「ルールって・・・」
「ここでは、ジャックの決めたルールは絶対なのよ」
「どうして黒っ・・・」
黒織君と言おうとして、止まった。
ああっ、マリアさんが期待の目で私を見てる。
言うのか？言うしかないのか？私

「ん？ん？どうしたの？亜衣。続きは？」
ニヤニヤしてる。絶対Ｓだこの人
半ばやけくそになりながら私は叫んだ。

「奏樺ッ！」
「ふふん。初々しいわねぇー」
「マリア、やめてください」
「あら～？私に対しては難なく使えるのにジャックの時にだけなんで躊躇してたのかなぁ～？不思議ねぇ～」
（うわぁ～ん。やっぱりこの人ドＳだよぅ）

「ふふっ、冗談よ。ジャックはかっこいいもんね」
「冗談じゃなかったでしょっ・・・まぁ・・・かっこいいのは認めますけど」
「で・・どうして奏樺の決めたルールは絶対なんですか？」
「ああ、そんなのは簡単よ。この屋敷はねジャックの自費で建てられたものなの」

自費＝ポケットマネー
自分で払うこと＝お金持ち

「はぁっ！？この大きな家が？」
「そっ、家だけじゃなくて備品に至るまで大半が・・・ね」
「す・・・すごい。お金持ちなんですね」
「まぁね。子供の頼みで温水プール作っちゃうほどのね」
（すごい。そんなすごい人が同じクラスだったなんて。なんか彼のこともっと知りたいかも）

「じゃあ、一級執事っていうのは？」
「ああ、それね。ジャックは、ある家族に雇われてるの」
「ある家族？」
「それはまた別の機会に・・・んでその級別のことかな？昔は執事飼いはロイヤル執事だったんだけど・・・今じゃ羊飼いにひっかけて執事飼いなんて呼ばれてるわ」

表にするとこうなるらしい

| | | |
|---|---|---|
| 最上級 | 執事飼い | ロイヤルメイド |
| 上級 | 一級執事 | 一級メイド |
| 中級 | 二級執事 | 二級メイド |
| 下級 | 三級執事 | 三級メイド |

「ホントはね～ジャックにも来たのよ。執事飼いの話」
「えっ、なんで受けなかったんですか？」
「執事飼いはね・・・本国（イギリス）勤めだからね。それに椿（つばき）もいたし」

椿ちゃん・・・奏樺の子供？とされる子
これは、聞かなくてはっ！！

「椿って？どなたです？」
「ん～ジャックの子ってことになるのかな？」
「えっ？実の子ってことですか？」
いやいや、年齢が
どう見てもあの子４歳だし
ありえないとは言えないけど・・・

「おっ、食いついてきたね。残念？だけど実の子じゃないんだよね～これが！」
「じ、じゃあ、誰の？」
「ジャックの師匠って話よ。少なくとも本人の話によると。だけどね。残念だけどジャックの師匠については私も詳細は知らないの」
「そ、そうだったんで・・・」
なんか、ちょっとぼや～っと

「亜衣・・ありゃ、のぼせちゃったかな。上がりましょ」
「す、すみません」
「いいの。いいの。ちょっと、話しすぎたわね」

脱衣所に来るとだんだん回復していった。
ふぅー、何か涼しくて気持ちいいー

「はい、これ。誰かが洗っててくれたみたいよ」
「わぁっ、すごい。泥がない」
私の服は泥汚れのすごいところまできちんとあらわれてシミひとつなかった。
「たぶんミキね。あの子洗濯好きだから」

「へぇっ、いろんな人がいるんですね」

うん、縮んでない。

さすがメイドさん。すごすぎる！

「さぁ、行くわよ。今日はジャックが腕によりをかけたらしいからぜひ食べていって」

「は、はい」

こうして、ずいぶんと仲良くなった私とマリアは、みんなのいるところへと向かった。

## 四想　羽崎　亜衣

私は、マリアに連れられて大広間に来て驚いた。
テーブルいっぱいの料理
七面鳥、スパゲティー、寿司、天ぷらなどなど数えきれないくれないくらいの品数だった。
まるでバイキングのようだった。

「ジャック―！亜衣もパーティーに参加させていいー？」
マリアさんが大声で尋ねる。

よく聞こえなかったのか私たちの方へ来る・・が次の一言で愕然とした。
「アイ・・？どなたです？マリアの知り合いの方でしょうか？」
「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・ジャック、歯ぁ食いしばりなさい」
「へっ？」

バキッ！！！

奏樺の体が吹っ飛んだ。
「あなたの連れてきた子でしょ！！！名前くらい知っってなさい！！！」
「は、はい・・・す、すみません。名前の方は存じてなかったものですから・・」
「今、覚えなさい！覚えた！？ＯＫ？もう忘れないようにこの子を名前で呼びなさい！！」

なんという気迫

言い訳も許さないといった感じで、奏樺に怒鳴りつける。
って私も名前の方は覚えてなかったんだけど・・・ちょっぴりショックかな・・・

「私に謝っても仕方ないの！亜衣に謝りなさい！」
「は、はいっ。す、すみませんでした。」
「ハイ。ジャック！この子の名前は？」
「羽崎亜衣様ですっ！」
「様は必要なぁい！！ついでに苗字も必要なぁぁい！！」

マリアから二発目の拳がとんだ。

バァァン！！！
今度は、さっきよりとんだ。

もはや、鬼だ。
マリアの体から発せられる殺気にそこにいるみんなが固まった。

「ぐふっ・・・亜衣っ！」
「はいっ！」
思わず返事してしまった。

「二度と忘れないことね。ジャック。次に忘れたら・・・」
「だ、大丈夫です」

ここでマリアは笑顔で
「はいっ。じゃあそういうわけで、亜衣をよろしくねっー」
その場にいた全員がこう返事した。

「イエッサー！！！マリア！」

この屋敷のボスはマリアだ！
そう確信した私であった。

## 五想　　ミキ（前書き）

誤字脱字あったら教えてほしいかもです。

## 五想　　ミキ

「それでは、皆さんパーティーを始めましょう！」
両頬にマリアの拳跡がついた奏樺が、ホールにいる全員に言う。
みんなが料理を食べ始める。

「亜衣・・・洋服に不備はありませんでした？」
きれいな黒い髪をした女の人が私に聞いてきた。
「ミキ？」
「はい。そうですが・・・なにか？」
「あ、の・・・服きれいにしてもらってありがとうございました」

お礼を言うとメイドさんは笑顔で
「いえ。喜んでいただいて何よりです」
と言い残すとどこかへ行ってしまった。

ミキ・・・か
ここにいる人ってホントきれいな人多いなぁ
ってか綺麗すぎっ！

なんてことを考えていると・・・
「ウィーッス、ヘイ亜衣！楽しんでるぅー？」
とマリアと奏樺がやってきた。
マリアは、なんと片手に瓶を持っている。

「亜衣、シャンメリーでもいかがです？」
「あっ、頂戴」
きれいなワインレッドの液体をグラスに注いでもらう。

「それで、もう7時すぎますけどお家の方は・・・」
奏樺が私に聞く
家・・・正直、こんな楽しい時間を過ごしてるのにいまさら一人あのさみしい家に戻りたくはない
でも・・・戻んなきゃいけないかぁ～

「ちょっと、ちょっとぉ～私から亜衣取らないでよぉ～いいじゃないここに泊まってもらいましょぉ～」
「ですけどマリア。彼女にもお家の・・」
「あっ、あのっ私・・・ここに泊めてもらえるんですか？」

二人が私の方を見てキョトンとしている。
「泊めていただけたら・・・嬉しいんです・・・ケド・・・？」
「良いんですか？お家の方は？」
「両親、海外へ出張で半年間帰ってきてないの」
「なにぃなにぃ～それ、グッドよぉ～決めたわ。亜衣学校始まるまでぇ～私の部屋泊まりなさいぃ～」

えっ？
えぇぇぇぇ！！
「良いんですか？ここに泊めていただいても？」
「何言ってんの？あたりまえじゃない～」
「っていうか・・・マリア、貴方さっきから何あおって・・・ッ！！！」

ん？あれ？
マリアの持っていた瓶を見て奏樺がギョッとした。

「悠！！！ここです！マリアが一本目のドン・ペリニヨンを持っていました！！」

奏樺が叫んだ。
何だろう？　ドン・ペリニヨンって
っていっぱい人が集まってきた。

「わわわぁぁぁぁ！マリアッ！お前、これ空じゃねぇーか！？」
「ウワァァァン！ジャックが買ってくれたドンペリがぁぁぁ！！」
うわぁ、みんな悲惨な顔に・・・
それに・・・ドン・ペリニヨンってドンペリのことかぁ
ジャックが買ってくれたってどんだけ金持ちなんスか？

「お、落ち着いて。皆さんあと４本あります！マリアに取られぬよう死守を！」
「イエッサー！ジャック（奏樺）！」
「ふっふっふ。甘いわね。ジャック。この私からお酒を取ろうなんて」
そう言って近くのテーブルにある瓶に向かって一直線

「負けるかっ！」
と言って三人の執事さんたちがマリアの前に立ちふさがるが・・・
一閃
吹き飛ばされる執事さんたち・・・哀れ

「僕が守りますッ！！！」
そう言って奏樺も後を追う。が、とても追いつけそうにない。
と思っていたら。

銀の指輪の付いている人差し指を前に振った。
その瞬間、瓶を載せたテーブルごと宙に待った。
テーブルはマリアの頭上を越え奏樺のもとに・・・す、凄いッ

「はい。悠。おそらく滓(おり)はまわっていないと思うのですが・・」
「おおっさんきゅー！ジャック！」
と言って逃げて行った。

「あの、今のは？」
「何がです？」
「今の！なんかテーブルが来たりしたアレ！」
「ああ、銀の指輪(シルバーリング)のことですか？」
ここでは日常的にあることらしい。

「よくわかんないけど、あれどうやったの？」
と私が聞くと両手の指輪を見せてくれた。
「これが僕の武器の一つで金の指輪(ゴールドリング)と銀の指輪(シルバーリング)です。二つとも特製の糸とおもりが内蔵されてます」
「ふぅん。金と銀はどう違うの？」
「銀はわざと切れ味を落としてますが金は・・・」
と近くにある瓶をとり

シュパンッ！
一瞬で瓶の先端が切断された。
「と、チタン合金製の特別な指輪です。指輪には約３５ｍ程の糸が内蔵されています。もっとも、手袋をつけてないと僕の手も傷つきますけど」
「じゃあ、さっき武器の一つって言ったけど他には？」
「鍼と薬物、ナイフにエアーガン、火薬に・・・」
恐るべきものを次々と上げていった。

「わあああッ！ストップッ、ストップだってばっ！」
「はい？どうしてです？」
天然なのかな？一般人に・・・火薬って危ないんじゃあ

「パパッー♪」
と、後ろで声がした。多分、椿ちゃんだろう。
振り向くと7人の子供が私の後ろに立っていた。

「椿、楽しんでます？」
「うんっ。楽しいよぉ」
可愛いなぁー、やっぱり子供は良いなぁ

「奏兄ぃー、ケーキまだぁ？」
と8歳くらいの男の子が奏樺に聞いた。
「皆さん。もう、デザートですか？」
「うんっ。もうケーキ食べるぅー」
「わかりました。持ってきます。亜衣、すみませんが僕が戻ってくる間この子たちを見ててください」
「う、うん」

私が、そう言うと奏樺は、どこかへ行ってしまった。
自然と私の周りに子供たちがやってくる。
「お姉ちゃん誰ー？」
今度は、7歳くらいの女の子が私に聞いてきた。
「ん～と、奏樺の同級生・・・かな？」
「ふぅん、奏兄ぃの・・・」

不意に後ろから声がした。
「お待たせしました。デザートです」
振り返った私は思わず目を疑った。
私の眼に大型の3段ワゴンがあるのならまだいいだけ・・・なら

そのワゴンに乗っていたのは、白と茶色のウエディングケーキ並の
大きさのケーキ2つ
しかも、その下には普通のお店で売ってるようなホールケーキが5つ
さらに、その下にはポット5つと大量のティーカップ&ソーサーや
食器類が目に飛び込んできた。

す、すごすぎる・・・
「さぁ、皆さん一人ずつ並んでください」
あっという間に子供たちが並ぶ
続いて、メイドさんや執事さんが並ぶ

15分後、瞬時に切り分ける奏樺のせいなのか持ってきた時の半分
以下になった。
奏樺は、ケーキを切り分ける中、飲み物も同時に渡していた。

ようやく、おかわりの列も少なくなってきたころ
「亜衣ー。ケーキ、いらないんですかー」
と声をかけてくれた。

「もっ、もらうっ！」
と、私も急いで奏樺のもとに行く。
「どれがいいですか？ちなみに、これが僕の最新作なんですけど」
ホール型の果物がたくさん載ったケーキを指さす。
「じ、じゃあ。ソレで・・・って、これ全部奏樺が作ったの？」
「いえ、こっちの白いケーキはマリアが」
「へぇー、あっ私そのケーキ」
「はい。是非ご賞味あれ」

お皿に取ってもらって一口食べてみる
・・・美味しい

これは素直に言って美味しすぎるぅ～
店開けるんじゃない？ってくらいだ。

「紅茶、何になさいます？」
「ふえっ？こ、紅茶？さ、さぁ？奏樺のお勧めでいいよっ」
「そうですか？では・・・」

そう言って、何かを注ぎ始めた。
辺りにはそこはかとないいい香りがしてくる。

「どうぞ」
一言そう言って紅茶を差し出してきた。
一口、口に含んでみる。

「美味しい・・・これ、なんていう紅茶？」
「プリンス・オブ・ウェールズです。簡単に購入できるのでここでは頻繁に飲まれますね」

ジャック―！と、後ろからマリアの声がした。

「私にもケーキ！」
というマリアの顔は、赤かった。
「飲みすぎじゃないですか？マリア」
「分かってるわよ。だから、もう全部やったの。だから私も紅茶！」
「了解です。アールグレイですか？」
「そぉよ！ほんっと、完璧すぎてムカつくわね」

はい、と奏樺が差し出す。
「そうそう、子どもたち。寝かす時間じゃない？」
「そう言えば・・・」

と、ポケットから懐中時計を取り出した。
「8時45分・・・ちょっと、行ってきますね」
またどこかへ行ってしまった。

「そう言えば、子供も結構いるんですね。ここ」
「そぉね。子育てしながらも働ける場所って言うの？」
紅茶を一口すすりながら言うマリアさんはどこか嬉しげだった。

「ほら、さっきこの屋敷ジャックが建てたって言ったじゃない。あれだけじゃないのよ。あの子がお金出してるのは」
「えっ？他にも？」
「実を言うとね・・・この屋敷の使用人全員はね、ジャックに雇われてるの」
「ふぅん？はぁっ！全員！？えっ？だって60人くらいいましたよね？」
驚く私を見てマリアは笑いながら
「ほんっと、面白いわね。そぉなの。でもね、みんな給料同じなのよねー」
「えっ？そんなの不満が出るんじゃ・・・」
「ところがねー何て言ったらいいか。あの子らしいけどね。全員、年収5000万なの。全く、ここで働いたら他の所じゃ働けないわよ」

5000万・・・・（汗）
うちの親が稼ぐ年収は、半分も期待できない

「奏樺ってどうやって払ってるんですか？」
「さぁ、聞いたことない。あっ、帰ってきた」

「ふぅ、やっと寝てくれました」
「お疲れー、じゃあ、私たちこれから部屋行くから」
「そうですね。お休みなさい。マリア。亜衣」
「お休み、ジャック。さぁ行くわよ！亜衣」
「へっ？どこふぇっ・・・」

またずるずる引きずられていく私
こんなことさっきもあったような・・・

## 六想　遊戯者

マリアの部屋に入った私は驚いた。
広い・・・というのは勿論のことミニバーから大型本棚までそろっていた。

「亜衣ーなんか飲むー？」
と言ってもアルコールっぽい瓶しか見当たらないのですが・・・
「え、えーと。何があるんでございますか・・・？」
「何でもあるわよぉ。
　ロマネコンティ（貯蔵庫から失敬）にドンペリ（パーティーから失敬）に・・・あっ、シャトー・マルゴーの方が飲みやすいかしら」

おいおい、この姉さん私がアルコール摂取できる年齢だと思ってらっしゃるんじゃあ・・・

「なにぃなにぃ～？ノリ悪いわね！今日は悠、追い出したからゆっくりしゃべれるわよぉ～」
なんて言ってらしたから、てっきり夜通ししゃべるのかなぁ～と思っていたら

・・・爆睡
「もしも～し？マ～リ～ア？」
駄目だ・・・完全に眠ってらっしゃる
仕方がないので私も眠ろうとする

が・・・いろんなことがありすぎて簡単には眠れるものではない・・・

何の気なしに扉を開けて外に出てみる。
心地よい風にひかれ部屋の外に出てみる

廊下を歩いて行くとそこには・・・奏樺がいた。

「あれ？どうされたんですか？こんな時間に・・・」
「それはこっちのセリフ！寝てないの？」

私がそう言うと
「寝ましたよ。亜衣こそ寝ないんですか？」
「私は・・・その・・・なんて言うか・・」
う～ん、なんて言ったらいいんだろ？

「お腹すいたんですか？」
「違う！！！」
いきなり何てこと言うの！？この人

「私はぁ・・・その・・寝付けないって言うか・・・」
「そうですか。なら、僕と遊びません？子供達も寝てますし」
遊び？
なんと唐突な・・・

「最近、対戦相手がいなくて困ってたんですよ♪」
「は、はぁ・・・」
は、話についていけない

「何ができます？麻雀？トランプ？ビリヤード？チェス？」
「い、一応全部できるけど・・・」
「素晴らしい！じゃあ、ちょっとついてきてください」
そういう奏樺はどこか楽しげだった。

「好きなの？ゲーム」
「大好きです。コンピューターゲームはあまりしませけど・・・あっ、ここです」
目の前のドアには
『遊戯室』
と書かれていた。
ドアを開くと、本格的なテーブルがズラリ
ビリヤード台からダーツまで
一見するとプールバーかと思ってしまう。
「何にします？お好きなもので構いませんよ」
むむっ、これは・・・チャンス？
ここまで完璧な人を唯一打ち負かすことができるのでは・・・と淡い期待を抱きつつ自信のあるゲームを脳内検索する。
『オセロ』だ
「じゃあオセロで」
「ほぅ、自身がおありのご様子ですね」
妖しく奏樺の目が光る。だが、私もゲームにかけては、羽崎家最強を自負する。
「では、こちらにお座りください」
本格的なテーブルの前に座る

「それでは、スタートです」

パチン、パチンと3手ほど打ったところで私は名案を思い付く

「ねぇ、奏樺。これ、負けた人が勝った人の言うこと何でも3つきくって言うのはどう？」

「僕は、構いませんよ」

「絶対だからね。約束破らないでよ？」

「僕は執事ですよ？ジャック＝スペンサーの名に誓って破りません♪」

ふふっ、終わった時が楽しみね・・・

いささか、私を甘く見たのが運の尽きよっ！私の実力、思い知らせてやるわ！

15分後、奏樺の声が私の耳に届く

「僕の勝ちのようですね？」

目の前の盤面には、私の白が黒に埋め尽くされかけていた・・・

「そ、そんなぁ～」

「確か・・・『これ、負けた人が勝った人の言うこと何でも3つきくって言うのはどう？』でしたっけ？」

「そっ、そぉよ」

ううっ、まさか私が負けるなんて・・・

何？ここまで差があるの？

何から何まで完ぺきな上にその笑顔がムカつくわね。

「では、お願いの内容はまた今度。今日は、もうお休みください。

そう言って、私を部屋まで送ってくれた・・・

マリアの寝顔を見ながら不思議と心地の良い眠りに私はついた。

## 七想　　神矢　右京

朝、私は心地の良いまどろみを振り切るように目覚めた。
「ん？ここは・・・」
寝起きの頭をフルに働かす
（そうだった。奏樺の家に泊ったんだっけ）

「ふわぁ～あ、ちょっと寝すぎたかな？」
時計を見ると１０時３０分
なるほど、いつもよりおそい
隣に寝ていたはずのマリアの姿はなく代わりに酒瓶がごろごろ転がっていた。

「とりあえず・・・顔、洗いたい」
水場を求めて部屋を出る

え～と、水場水場
私はひたすら歩き続ける。

１０分後
え、え～と・・・
だんだんと人気が無くなってきてるのは気のせい・・だろうと思いたい
（どうしよう？もと来た道をダッシュで逆走しようか）
なんとなく、なんとなくだが悪い予感が頭をかすめる

（な、なぁに。ここだって屋敷の中なんだ。迷子とかにはなんないはずだし）
いろいろと曲がったりしてみる。

階段も上がったりもしてみる・・・

（さて、どうしよう・・・これはパーフェクトに迷子だ）
ケータイは・・・駄目だ。部屋に置いたままだ。

とりあえず、こういうときは

「だ～れ～か～！い～ま～せ～ん～か～！！！」
漫画やテレビの世界で使用される効果音は間違いなく『し～ん』だろう。
「いやいや、家で迷子になるって広すぎもほどがあるよっ！」

いっそ、火災探知機でも使うか？と思案していると後ろから
「どうされました？」
男の人の声が聞こえた

「奏樺？」
後ろを振り向いてみると・・
「いえ、申し訳ないのですがジャックではありません」
「いっいえ。そっ、その」

一見、狼を思わせるような体つきをした男の人だった。
左のほほに傷があるのが、とても印象的だった。
「どうされました？ここは、殆どが物置ですよ」
とても優しい声で私に尋ねる

「あっ、あの、道に・・迷ってしまったというか、なんというか」
「そうですか、ここは広いですし無理ありませんよ。よろしければジャックのところまでお連れしましょうか？」
「おっ、お願いします！」

うわぁ、ラッキー
昨日も助けてもらったし・・・もしや、私には神様の加護が？クリスマスなだけに・・・

「あの、大丈夫ですか？」
男の人が怪訝な顔で聞いてくる
「へっ？ひゃい。大丈夫です」
（うわー、私のバカ！ひゃいってなによ！」

私は、黙って男の人の後ろを付いていく
「そうそう、申し遅れました。私は、神矢右京（かみやうきょう）と申します。右京とお呼びください」
「あっ、私は」
「羽崎　亜衣・・・ですね？存じております」
私が名乗る前に右京が言った。

「なんで、私の名前を？」
と聞くと笑いながら
「ふふ、それは昨日あれだけ派手だったんですから・・・」

あっ、と私は昨日の出来事を思い出す。
鮮明に思い出される。
マリアが奏樺を殴って私の名前を呼んで・・・確かに派手だった。

「おそらく、この時間でしたらこの部屋にいるはずです。では、私はこれで」
「あ、ありがとうございます」
「いえ、執事ですから」
と言ってどこかへ行ってしまった。

（それにしても『執事』って言葉。結構用途あるなぁ）

などと思いながらドアを開けるとそこには・・・

## 八想　　天才幽霊（前書き）

今年最後の更新になりそうですよ？
と、言ってみたり・・・

## 八想　　天才幽霊

なんか、スーツ姿でガリゴリと書きこんでいる人がいた。
えっ？何？この人も殺しかねない殺伐とした空気
そう、『俺の邪魔したら殺すゼ？』的な
話すことすら躊躇わされる感じ？

仕方ないので私はしばし待つことにした・・・
何を書いているか気になるところではあるが

１５分後
コロンッ、とペンを放る音がして
「ふぅー」
と、奏樺が言った。
そして後ろ向きなのに
「何の御用しょう？すみません。気づいていたんですけど・・・」
と言いながら私の方を向いた。
ん？あれ、片眼鏡・・・？

「えっ？気づいてたの？」
凄いとかいうレベルじゃない・・・もはや、神？

「あれ？亜衣でしたか。朝食、お召し上がりになります？」
「う、うん。ってそれより何書いてたの？・・・それ、その片眼鏡は？」
先ほどから疑問だった事を聞いてみる。

「なにって・・・今やってたのは冬期休暇の課題です。それと、左目・・紅い眼の方は少々視力が低下してまして・・・」

課題？・・・課題！！！

「そーだよ！私もあったんだ！やらなきゃっ！」
いっつも、宿題系は締切の前日徹夜だから今回は早めにやっておこうと心に固く誓ってたのにぃ

「ま、まぁ。もらってから一日しか経ってませんし・・・」
「その一日が大切なのっ！奏樺はどこまで終わったの？」
こうしている間にも時間はドンドン減っていく
「どこまでって・・・終わりましたけど」
さも当たり前のように答えた

「ふぅん、そう・・・・はぁッ！？終わった？いやいや、何言ってるの？」
「ホントですけど・・・ホラ」
そう言って今まで書いていたテキスト&ノートを私に見せた・・・

「・・・・・・・貴方、ちょっと殴らせてくれない？」
「はい？何故に？」
「こんなことがあってたまるかぁー！なんで終わってるのよ！」
渡されたノートにはびっしりと・・・それも正答が書き込まれていた。
答えを見た？いやいや、これ答え配られてないはずだし
こんなことがあってたまる・・・まさかっ！

「奏樺・・・この前とその前のテスト何位だった？」
恐る恐る聞いてみる。
「はい？一位でしたけど・・・それが何か？」

『聖（ひじり）ヶ崎高等学校七不思議更新版』の一つ

『幽霊のテスト参加』

私たちの学校の誰も入学から一位を取ったことがないことと成績優秀者の張り紙が今年からなくなったことから
先生も幽霊のテスト参加を認めているとか言う噂が立つくらい。
もはや、満点を取るしか一位にはなれないといわれているほど・・・

「お前かぁぁぁぁぁ！！！」
「へっ？ど、どうされました？」
「どうもこうも・・・ああっ、こんなことが・・・」

それから奏樺に噂の説明をしてあげた。
ふんふん、とかほぅほぅ、とか言ってるけどほんとにわかってんのかなぁ？この人

「いやぁ、参りましたね・・・そんな凄い噂になってたとは・・・」
「そ・れ・で、何点だったの？テスト」
「亜衣？なんか怖いですよ。えーっと、全部で２５０ですかね。基本科目は・・・」

２５０・・・一科目は５０
基本科目は、５つ＝満点

「満点じゃないのぉ！なんで、そんなに頭いいのよぉ！」
「えーっと、一応大学卒業してるんですけど・・・」
大学？あの、高校卒業者の行く学校？

「いやいや、外国じゃあるまいし日本よ？ここは」
「ええ、僕は、外国での生活の方が長いですね」

聞いてみるとこういうことらしい
つまり、5歳の時点で外国を師匠と旅していたらしい。
その後、イギリスに1年住んでその間にオックスフォード大学というところを出たらしい。
したがって、親と暮らしたのは六年くらいらしい

「いやぁ、あのときは毎日必死で勉強しましたねぇ。国の滞在期間平均3ヶ月でそこの言葉を覚えなきゃいけませんでしたし」
「ずっと思ってたんだけど・・・天才？」
「いえいえ、天才なんて言ったら本国に行くともっとすごい人がいますよ」

はぁ～、改めて思う
この人たちとは住む世界が違う、と

「それより、荷物取りに行くのでしょう？僕も行きますよ。子どもたちはほかの方が面倒みてくださいますし・・・」
「そう？ありがと・・・ところで、宿題写さ」
「駄目です。自分でやらなきゃ。分からないところは、僕が教えて差し上げますよ」

ふぅ～、天才は頭固いなぁ

## 八想　　天才幽霊（後書き）

ではでは、皆さん
来年もよろしくお願いします。
では、よいお年を

１２月３１日　クロカラス

## 九想　幸せ者（前書き）

あけましておめでとうございますっ
遅すぎるわこの野郎って感じですが一応
さてさて、今回のこの求ですが（略し方考えてみた）
最初ふんわり中どっしり後すっきりって感じです
なんのこっちゃい？
と思う人はぜひ“この求”をご賞味あれ
（今回は重めかもですがコメもあり）

## 九想　　幸せ者

ふぅっ、なんとか奏樺の助けもありなんとか課題の7分の1は終わった。
・・・・・・なに？なんでこの量を1日とたたず終わらせることができるの？

神様は不公平って言葉・・・本当なんじゃないかしら？
神様信仰宗教には悪いけれど

「ねぇ、もう今日はちょっとやめない？」
横に涼しげな顔をして座ってるムカつく天才イケメンに私は提案してみた。
「そうですね。亜衣・・・今日はよくがんばりましたね」

ん～、1日で終わった人から言われてもなぁ
私の表情を読み取ったのかはしらないけど

「この調子で7日間やっていけば終わりますって」
と笑顔で言った。
スマイル0円どころじゃない。
100万ドルの夜景ならぬ100万ドルの笑顔だ。

「そっ、そうね。がんばらなくっちゃ」
そう言われたら何も言えないじゃない。

けど、こんなに早く宿題が終わったのは奏樺のおかげだということも事実だ。
一人だったら今日やった半分も行かないだろう。

ちょっと恥ずかしいけど・・・

「ねぇ、奏樺」
「はい？」
純粋そうな顔で私を見つめながら返事をしてくれた。

「・・・アリガト」
呆気に取られような顔を少しした後
少し笑って

「どういたしまして」
と彼は返した。

「では、夕食の支度がありますから僕はこれで・・・
あっ、今日も楽しみにしておいて下さいねっ？」
と言って部屋から出て行った。

楽しみに・・・ね
私は、親が海外へ行ってからあまり食事というものを楽しく感じた
ことはなかった。

一人で食べる朝食
友人と食べる昼食
一人で作る夕食

正直に言うと私は寂しかったのかもしれない。
両親の席のあいた食卓
家では話す人もいなくて・・・
話を聞いてくれる人もいなくて・・・
どこかにで辛い部分を無理に押し込んでいたのかもしれない。

それでも仕方がないって自分に嘘をついて
それでも“寂しい”って両親にわがままを言うこともしなくて・・・
私は・・・自分の話を聞いてほしい人が欲しかったのかもしれない

人と話す機会は学校と休日
家では宿題をしたりテレビを見たり・・・眠ったりするだけ
時折小さい頃の・・・まだ家族3人で食事をすることが当たり前だった頃の夢を見た。
夢を見た日の朝は必ず顔や枕に涙が伝った跡があった。

私は弱いのかもしれない。
でも、お父さんとお母さん、友達の前では虚勢を張って強がったり
平気な振りをしてきた。

それなのになんでここにきてこの気持ちが揺らぐのだろう？
そして私はなんて・・・なんて自分勝手な人間なのだろう？
自分で決めたのに・・・自分が勝手に決めたのに最後まで“演技”
ができない。

みんなで食事をする。
一緒に眠る。
人と話す。

たったそれだけなのに
たったそれだけのことなのに嬉しくて嬉しくてたまらない
そして思ってしまう。
もういいのかもって・・・
もう“ふり”なんてやめてしまってもいいのかもって・・・

そんなことを思う私と『絶対に続けなきゃって思う』意地っ張りな私がいて
“ふり”をやめたいと思っている私と“ふり”を続けなきゃっておもっている私がいて
思い悩んでる私がいる。

そして、悩んでる私に優しく微笑んでくれる彼がいて
優しくされて揺らぎそうになる。
涙が私の頬を伝い机やノートを静かに濡らしていく

奏樺・・・奏樺・・・

「奏樺っ」

「はい？」

・・・・・は？
誰もいないはずなのに返事が返ってきたのに私は驚いた。
彼が私に近づいているのがわかる。
「一応ノックはしたんですけど返事がなくて・・・すみません」

やっやだ！
今のカッコ悪い姿を見られたくない

「いっ、今はこっ、来ないひぇ！」
強く叫んだつもりだったけど泣いてるせいか変な声になってしまった。

彼が私の横に来た。
「どうなされまし・・・っ」

彼が息をのんだ。
多分・・・いや、絶対泣いている私を見て驚いたのだと思う。
私は急いで袖で目をこすって言う
「ああこれね？ちょっと目にゴミがはいっちゃって・・・」
自分でも苦しい言い訳だと思う
ゴミが目に入ったくらいでこんなに泣くわけがない
目をしきりにこする私の腕を彼が押さえつけた。
そして・・・微笑みながら私に言った
「良いじゃないですか・・・泣きたいときには泣くで何が悪いんです？」
そして私の腕を解放した彼の腕が、私の頭を優しく抱きしめる。
「あなたがつらい涙を流すなら・・・一人ではつらいのなら僕も一緒に泣きましょう」
その言葉が閉ざされた私の心の鍵を解き放ったのかもしれない。
歯止めがきかなくなり小さな子供のようにしゃっくりをあげて泣いてしまった。
「うっ・・うっ・・・うわぁぁぁっ！」
「いいんですよ。我慢しなくても・・・泣きたいだけ泣けばいいんです」
２０分・・・いや、３０分だろうか
涙が枯れ始めたとき彼の手が私の頭をなでてくれた。
ようやく頭を上げるようになって上を見上げることができるように

なったので彼の・・・奏樺の顔を見たら
彼も泣いてた・・・
え？
一緒に・・・一緒に彼は泣いてくれたの？
そう思った時、枯れ始めたと思った涙が再びあふれてきた。
これは、つらい涙なんかじゃない
こみあげてくる思い
これは・・この思いは、しばらく感じたことのない感情
うれしいって感情だ
そう思ったら自然に笑いが出てきた。
「ふふっ。あははっ」
いきなり笑いだした私をぼうぜんと見ていた奏樺も次第に私につられて笑いだした。
今まで泣き声であふれていた部屋が今度は笑い声に満ちていった。
「あはっ。もういいよ。放して」
今度は自然にお礼を言うことができた。
「何かすっきりしちゃった。ありがと」
そう言うと彼は
「もう大丈夫そうですね？はい、どうぞ」
そう言ってハンカチを差し出した。
「ありがと。でも奏樺も」
受け取ったハンカチで彼の涙を拭く

彼の涙のしずくが一瞬でハンカチに吸収される。
そして、私も彼のハンカチでちょっぴりしょっぱいしずくを拭き取る。
「こうするとなんか奏樺の涙と私の涙・・・キスしてるみたいじゃない？」ってちょっと上目づかいで彼を見上げてみる
「えっ？ちょっと・・・へっ？それって」
どんどん赤くなっていく彼はなんだか・・・とっても可愛く見えた。
「あははっ・・・冗談よ」と笑ってると見せかけ彼の頭を抱きしめ・・・
彼の頬にチュッとキスをして急いで立ち上がり彼の目の前に立ってみる。
「えっ！」
と彼は私にキスされたところを手で押さえて狼狽している。
ここでトドメっ
「今・・・奏樺の手、唇に持っていってもいいよ？間接キスになるからっ」
できるだけ可愛く言ってみたら
さっきよりもひどくうろたえて
「え？えぇー？」
とか言ってる。
「さっ、奏樺が腕によりをかけて作ったおいしいごはん食べにいこっか」

と言って背を向けたら後ろから
「へっ？」
と驚いた声が聞こえた・・・
どうしたの？って訊く前に彼が驚いたわけがわかってしまった
ドアの隙間から
「ねっ、年頃の男女が二人っきりで何もないわけがないでしょ？」
「う～む、嬢ちゃんがこんなに積極的だとは・・・」
「奏樺があんなにうろたえたの初めてですね」
と聞こえてきた。
「しっ～静かにっ！気づかれるわよっ」
「おおっ、すまねぇ」
「気づかれたらおしまいですね」
私は、ゆっくりとドアを開けてみる。
そこには
麻島夫婦とミキ
3人はギョッとした顔をして
「は、は～い♪亜衣。ご機嫌いかが？」
と言った。
その答えとして私は
「きゃーーーーーーーーっ！」
と顔を赤くして屋敷どころか近所にまで聞こえるかと思うような声
で叫んだ。

「いっ、いひゅから？」
ろれつの回らない舌で尋ねてみる

「い、いつからって・・・奏樺がハンカチを亜衣に差し出したところから？」
よ、よりによっていっちばん・・・いっちばん恥ずかしいところから？

「え、え～と」
後ろでは奏樺が頬をかいている

「とっ、とりあえずご飯・・・ご飯食べましょ？ねっ？」
「おおっそうだな！飯だ飯！」
「ご飯・・・食べに行きましょ」

そそくさと“トリオ”が逃げていく
奏樺に目を向けてみると
「とっ、とりあえずご飯食べにいきましょう・・・か？」

私もうれしいのか怒っているのかそれとも恥ずかしいのか自分でも分からなくなり

「いっぱい食べるんだからっ」
と叫んでみた。

ただ、前のようにもやもやとした気持ではなかったということは確かだ。

## 九想　　幸せ者（後書き）

いかかでしたか？
ちょっと、今回は書いてて自分でもぽろっと
是非感想を

本当に励みになります。
ではでは、またこの世界でお会いしましょう
２００９年２月２２日

クロカラス

## 十想　　奇術師

クリスマスパーティーは昨日のイブよりも人が多かった。
奏樺に聞くと
「イブは恋人と過ごし翌日は家族と過ごす人が多いですね」
と目をそらしながら答えた。
いや、ね？
私だって気分が高揚する時だってあるのよ？
そりゃ人間なのよ？
気づいた時には口から出ちゃったんだから仕方ないじゃない
ほんのちょっと前の自分の失態を思い出してみる・・・痴態？

“こうするとなんか奏樺の涙と私の涙・・・キスしてるみたいじゃない？”
とか
彼の頬にチュッとキスをして急いで立ち上がり彼の目の前に立ってみたり
または

“今・・・奏樺の手、唇に持っていってもいいよ？間接キスになるからっ”

ううむ、我ながら恥ずかしいことをしたものね・・・
しかもよりによって同級生に

「へぇ～い♪亜衣っ、たのっしんでるぅ？」

もうできちゃってるマリアが話しかけてくる。

「あぁ～！今失礼にゃこと考えてないぃ～？」

言葉まで変になってる。
失礼“にゃ”って何？

「考えてないですよ？ホントに」

「そぉ？まぁ、いいわ」

と言って私の隣に来る。

「そうそう、さっきのことは、あまり気にしなくていいわ。

実際、もっとすんごいアプローチかける子もいるんだから」

「は、はぁ」

どんなことをするのだろうか？

「たぶん、同じ学校の子にあんなこと言われたからどうしていいか分からないだけじゃない？

気にすることないわよ」

多分ってなんですか？多分って

「あっ、始まるわよ！奏樺&神矢兄弟のマジックショー」

「神矢兄弟？」

昨日、私が道に迷った時に奏樺のところに案内してくれた執事さんを思い出す。

確か、右京という名前ではなかったか

「右京って兄弟、いるんですか？」

「そうよ？左の頬に傷があるのが右京、傷がないのが左京（さきょう）ね

二人とも一級執事ね」

「へぇ～。で、あれは何を？」

私の目が正常に機能しているならばよくマジックショーにあるような箱に奏樺が入りその横を

神矢兄弟が剣で今にも箱に穴をあけようとしているんですが？

「何って、手品じゃない」

「いやいや、あんなもので刺されたら死ぬか大怪我ですよ？」

「まぁ、見ときなさいって」

一本目

右京が右側に剣を突き刺した。

二本目

左京が左側に剣を突き刺した。

そうやって交互に剣を突き刺していくうちに左右８本の剣が箱に刺さったことになる。

「ちょっ！大丈夫なんですか？アレ」

確かに箱開けて無傷だったら拍手ものだが血まみれの奏樺がいたら蒼白ものである。

「んー・・・・大丈夫！」

「根拠は！？」

そう言っていくうちに今度は箱を回してまた剣を突き刺し始めた。

だんだんハリネズミのようになっていく箱が可哀そうになってきた。

（もしや、これを機に命を奪っているのでは？）
そう思えるくらいのありさまだった。
そこらのマジックショーでは、ここまではやらないだろう。

計３２本の剣が箱に刺さった。

「さぁ、奏樺は生きているでしょうか？私もちょっと自信ないです」
左京がマイクを持って声高に言う。

自信ないって・・・まずくない？

「ですが、最後にトドメを刺したいと思います」

トドメって言っちゃってる！

ん？右京が大きな槍みたいなものを持ってきた。
どんどん箱に近づいて・・・箱の真上に突き刺したぁー！
これは・・・さっ、殺人なのでは？

「さぁ、確かめてみましょう」
そう言って剣をどんどん引き抜いていく。

「では、開けてみたいと思います」

箱が開けられた時・・・いつものダークスーツに身を包んだ奏樺がいた。
「ちっ、また無事でしたよ！皆さん」
“ちっ”て・・・おいおい
「ねっ、言ったでしょ？大丈夫って」
マリアがあっけからんという。
「は、はあ。でも、どうやってるんですかね？あれ」
「さぁ？訊いてみたら？本人に」
まだ、マジックをしている神矢兄弟
どうやら、奏樺が出たのは箱のマジックだけだったようだ。
「あっ、きたわよ」
マリアが指さす先に奏樺がいた。
本人もこっちに気づいたらしく手を振りながら来た。
「どうでした？僕の手品」
笑顔で尋ねてくる奏樺
本当にいたずらが成功した子供のようだ。
「よく出来てたけど、あれってどうやってるの？」
私は先ほどの疑問を尋ねてみる。

そう言うと困ったような顔をしたので私はあわてて
「あっ、門外不出とかだったらいいけど・・・」

「あー……そう言うのではなくてですね・・・
なんて言ったらいいんですかね？
タネがないんですよ。正直に言うと」

タネがない？
どういうことだろう？

「そのままの意味です。箱の中で剣を避けてるんですよね。アレ」

「……はぁ！？」
全く意味が分からない。
というより、信じられない。
避けてる？３２本＋αのあれを？

「ええ、だから必死でやらないと怪我しちゃったりするので・・・」

いやいや、照れながらいうこっちゃないでしょ！あんた！

「まぁ、タネなし手品ってやつですね」

「タネがない手品は手品とは、いわなぁぁぁい！」

「ナイス突っ込み♪」
これはマリアだ。

こうして、今年のクリスマスが終わった。
とても楽しかった・・・・By亜衣

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7581f/

---

この小さな世界であなたを求める

2010年10月16日06時58分発行